

体験発表 『介護施設における被災体験』

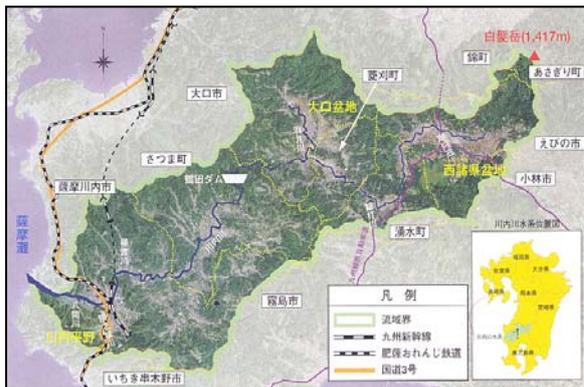
鹿児島県伊佐市 グループホーム大口めぐみの里
事務長 古城恵人

1、【自己紹介及び施設の位置等の概要】

■ 私は鹿児島県伊佐市曾木にあります有限会社めぐみ福祉会の認知症の高齢者をお預かりしているグループホーム大口めぐみの里の事務長をしている古城恵人と申します。また、この他伊佐市議会議員として丁度この3月で満20年になります。

このホームは、2ユニット18人の認知症対応型共同生活事業所と申しまして認知症のある高齢者が暮しておられます。この隣接地に小規模の定員15名の通所介護施設、デイサービスセンターめぐみもあります。また、つい先日3月15日にオープンいたしました「有料老人ホーム・愛の郷めぐみ」や訪問介護事業所の4つを姉弟4人で有限会社で一体的に経営しています。

■ ここの位置をご説明いたしますと、川内川は約延長137km。ここは河口から65kmの丁度中流に位置し大口盆地の中にあります。周辺は伊佐米で知られた水田地帯で、このすぐ下流に滝幅210m×高さ12mの東洋のナイヤガラで知られる曾木の滝がありまして観光名所でございます。私どもの大口めぐみの里は、川内川本川と羽月川が直角に交わる合流点にあります。



川内川の位置と概要



被災時の航空写真

■ ここは本川が熊本、宮崎のおよそ400平方Kmの水を集め、また、羽月川も伊佐市の300平方Kmの水を集める河川ですから、水が押し合いへし合いせめぎ合う合流地点でもあります。大口めぐみの里から川までは直線で10

0 m ありません。本当にすぐ近接しています。写真 I

■ 平成 18 年 7 月の災害当日前からの総雨量は、さつま町で 1 2 3 7 mm 伊佐市で 1 0 8 8 mm、時間降雨量は 8 0 mm 例年 7 月 1 月分の降雨量の平均値の倍の量でした。

地域の方の多くが、平成 18 年鹿児島県北部豪雨災害にあつてからというものトラウマとなりまして大雨のたびに私自身も本当に頭がいたい思いをしております。この災害で川内川添いの 3 市 2 町は、5 年間の『激甚災害特別事業』に指定していただきこの間改修工事をしていただきましたが、一番被害が大きく市街地中心をやられたさつま町は 1 年延長して現在も進行中です。



大口めぐみの里と避難した古川医院・曾木小

■ 九州第 2 の川内川は、あばれ川でこれまで多くの災害を出してきました。私たちの住むこの地点は、これまでは大きな災害は免れてきました。なぜかといいますと、① 川内川は上流部の吉松に狭窄部があります。ここで丁度ウイナーとウイナーをくびって繋いでいる形状でせき止められている上、約 1 0 0 年前に水俣チツソの発電所に通水する阿波井堰が設けられており、歴史的にも繰り返し浸水・冠水被害にあい吉松地区は被災し苦しんできたところです。② その約 5 km ほど下流の轟地区にはまた川幅 2 5 m の岩場でせき止められた狭窄部がありました。さらに③ その 2 km 下流には、直角にくびれた川幅の狭い湯之尾温泉街があり大雨＝洪水被害でいつも新聞・テレビのニュースにならない事はないといわれてきた常襲地帯があつたからです。

■ 平成 18 年 7 月の場合、被災原因は、8 0 年～1 0 0 年に 1 回の記録的な豪雨だったといわれますが、私たちは②の轟地区が幅 1 2 0 m に拡幅改修された

こと、③湯之尾地区が捷水路つまりバイパスが出来たことにより伊佐盆地に一挙に流れ込んできたことが大きな原因ではないかと住民だけでなく専門家もそうだと考えています。

もちろん、市街地の整備や圃場整備が行われ雨が降ったら即一挙に川に流れ込むようになってことも原因の一つではあるでしょうが、「治水は下流から」というのが定石がらも、財政的な問題や計画的な治水をといいながらも被害に遭ったところから手を打たざるを得ないことも理由の一つかもしれませんが、地域的なエゴ・言い分ではもっとも大きな原因と思います。

■ これに加えて湯之尾井堰の操作規則も原因の一つと考えています。これは水田の用水のために作られた巻上げ形の井堰にもかかわらず、大雨の場合上流の観測点で何時頃、どのくらいの水が流れ込むか瞬時に分かるシステムになっているといいながら、水位が上がり決められた高さまで来ないと開けないのですから上流からのものすごい水圧もかかり伊佐盆地は川が浅くなり天井川になりつつあります。このために築堤が遅れて未整備の川間川と遊水地の堤防代わりの県道針持・菱刈線が決壊。この水が下流の私たちの地区に2本の本川となって席捲したというのが実状であります。

■ 被害を大きくしたという点からは、当日は午後2時半過ぎ菱刈町長が本城地区の視察途中、偶然にも決壊現場に遭遇、間一発車を止め降りた瞬間目の前の県道が決壊流されたのです。ところが、残念なことにこの報告が消防署、警察にもながされなかったのです。

遊水地の堤防代わりの県道針持・菱刈線が決壊すれば、下流の曾木校区に水が押し寄せこの水は堤防の内側を流れ行き場を失い浸水してしまう事は十分かっていたはずなのです。

私たちは、この濁流がなんで流れてくるのか、上流左岸の堤防が切れたのではないのか何度も消防署や行政に問い合わせたのですが「分からない」との回答でした。私は避難先の曾木小でインターネットで調べたのですが、とうとうその夜中までのせられませんでした。

堤防代わりの県道決壊



川間川左右両岸が
堤防未改修であり
遊水地となっていた



■ この時点で菱刈町、大口市役所、消防署、消防団の連携がキチンと取れていれば地震や火災に比べて数時間の余裕はあったはずですから住民も避難にも応じ。車、家畜、農機具など被害は少なくすんだはずであります。確かに同時刻に菱刈町の国道のがけ崩れで車もろとも押しつぶされる死亡事故や各地で浸水が始まっていた事で市、町も消防署、消防団もきりきり舞いであったと理解はしますが、決壊現場の近くの住民も見聞きした人は他にもいたはずです。

2、【大口めぐみの里の避難と対応】

■ 災害はいつも私たち人間の予知をこえ突然思わぬ形でやってきます。先ほど述べましたが、これまで被災経験が全くといっていいほどなかった私たちの曾木地区住民は、「まさか!」「まさか!」ほとんどの方は想定外の被災だったのです。当日は早朝6時から下殿橋の橋げたを目安に観測し、心配ないとおもっていました。しかし、7時を過ぎて雨音が激しくなりホームの中での物音もかき消されるような雨の降り方は不気味さに不安を通り越して恐怖を感じたのは私だけではありません。

それから、30分置きぐらいに川を観測にいきました。この65km地点の川内川の計画水量が3000m³と聞いていました。しかし、昼近くになり橋げたが隠れるようになり堤防の上から水に手が届くぐらいまで水位が上がってきたのです。ホームに帰るとすぐインターネットで昼以降の雨具もの動きを確認しました。ところが、夕方6時までこのまま県境に沿う形で川内川の上に居座ることがわかりました。

写真

■ 早速園長に報告、阿吽の呼吸といいますが即『避難をしよう』と決まりました。その方針は①昼食を早く採り入所者全員避難する、②おにぎりを炊けるだけ炊き握る、③入所者の皆さんの下着や着替え、タオルやオムツの準備、③ポ

ータブルトイレ3を持参する。④飲み物はあるだけの容器にお茶・水を入れて持参する。そして、⑤歩行困難な車椅子の方4名は、忠元公園の園長宅へ、その方々には⑥敷布団も運ぶ。⑦これ以外の14名とデイサービスで帰れなくなった5名もあわせて1.5km離れた曾木小学校に避難する。この決定と連絡が出来たのが12時少し前でした。

■ところが、もうすでにこの時には大口方面への国道267号線には市の職員が交通立哨して「大口南中、堂崎橋付近で冠水、通行不能となっている。車は迂回」となっていましたから、⑤歩行困難な車椅子の方4名は700m離れたかねてお世話になっている古川医院の先生に「緊急事態で待合室をつかわせていただきたいのですが」とお願いしてOKを取り付け変更となったのです。本当にありがたいことでした。この時点では私たちも「ひょっとしたら庭ぐらいいまで水があがるかな」とは思いましたが、まさか床上80～150cmの浸水は全く予想できませんでしたし、認知症の高齢者の命を預かっている以上「避難も言われてする避難ではなく率先して行動する避難を」ほどのことだったのです。

■ 避難開始は12時半前から、まずタオル・衣類・ポータブルトイレを古川先生のところと曾木小に運び込みました。この時点で市役所では、避難指示を出されて消防団員の皆さんが呼びかけて下さっていたそうですが、雨音もあったからでしょう私たちは全く気づきませんでした。寝たきりの方を敷布団とシートでくるみ、オネショマットかぶせ車の乗せおろしでは全員ずぶ濡れになって行いました。その後消防団の方々が応援にかけつけて下さり避難完了が午後2時前でした。この時、国道など主要道路情報が入り冠水などで出勤のスタッフのうち1名を除いた他の方は自宅に帰れないことが判明したので、人員配置を決めました。

(人員配置)

避難先	入所者・ご利用者数	スタッフ数
曾木小学校	20	12
古川医院	4	3

- 「**避難**」方針を手早く決断できたことはよかった。
- **グループホーム1、2棟、デイサービス3つの連携**ができたことがよかった。
- **避難先を車椅子、寝たきりの方は古川医院、それ以外は曾木小に決**

断したことはよかった。

- **当時大口市には防災マップもなく台風時には曾木小学校に避難する
となっていたが、市の避難指示の前に避難を決断しすばやく行動し
たのがよかった。**
- **携帯食料・水など備蓄していなかったが短時間におにぎり240個(6
升)と水を準備できたことはよかった。**

3、【避難先で感じたこと】

■ 曾木小学校では二つの普通教室と廊下とつながったオープンスペースを使って休んでいただくことになりました。初めのうちは避難されてこられた方々は、一様に合点のいかない顔をされていましたが、①大口めぐみの里のスタッフが分け隔てなく避難されてきた地域の高齢者の排泄の世話をしたり持参したおにぎりを勧めたり、介護をしたことですっかり違和感が取除かれたことを感じました。②小学校のトイレで高齢者は、座ったきり立ちあがれない方が多く大口めぐみの里からポータブルトイレを持ってきたことが避難住民のために大いに役立ってとてもよかった。

③避難所では、この日は終日食料の支給もなく着のみ着のまま避難されたかたと、大口めぐみの里から準備し持参したおにぎりを分けあって食べられてよかった。

③着の身着のままですぶ濡れでこられた方（特に高齢者）には、タオルなどもなく、食事もなく体調を崩されるケースもあった。高齢者の方には着物を貸して喜ばれた。

この①、②、③はかねての高齢者介護で身についた感覚、直感であり、母性本能にすぐれた女性の感覚、直感は高く評価されていいと思った。

4、【浸水被害の拡大と入所者の状況】

■ 私は、避難が一段落した4時半ごろからホームに一番近い樋門のあたりで操作される管理人と祈るような気持ちで集落をみつめていました。胸元までの水に浸かった車、じわじわと内水の水位が高くなるにつれて川の水位も止まりました。内水が国道の低いところを流れ土台を流された2戸が傾き、もはや万

事休す 6 時頃には管理人も操作をあきらめ通れるところは堤防だけになった時点で避難所にやっとたどり着きました。しかし、このあと曾木小まへの国道が冠水

■ あたりの住宅がつかりはじめあきらめ顔でながめていましたが、そのときになって避難所が孤立した事に気がついたのです。避難所が水害で孤立するなんて校区民誰もが思っただけでなかったのですが、被災してみてここが川の合流点であり堤防が決壊したら水の吐けどころのないたまり場になっているということに気づかされたのです。

曾木小では、浸水した世帯のうち避難されていない方の安否確認と救出が深夜まで続けられ自宅の中二階や二階に避難されていた 2 世帯 6 人が消防団・消防署のご尽力で救出されました。

結局、国道は 1.5 m 冠水し朝になってからやっと消防団のボートで市役所からのビニールのまま炊かれた水洗米がとどきました。

■ ホームの高齢者の中にも体調を崩される方が出はじめボートで北薩病院（8 名）、松元整形外科病院（7 名）に移って頂き、のこる全員も市立の養老ホームにお願いできました。起き上がりや高さを自由に変えられるベットの方が、床から立ち上がったたり横になるだけで数人がかりですから体調がおかしくなるのは当然なのです。

避難先の曾木小が孤立
体調を崩される入居者を
県立北薩病院にボートや
おんぶして移している状況



○ **ここが水のたまり場、また被災するところであると気づかされた。**

- **明るい時間帯の被災でよかった。夜間帯であつたらもっと大きな被災になった。**
- **避難者のほとんどが食料はもちろん着のみ着のままでの被災体験であつた**
- **北薩病院(8名)、松元整形外科病院(7名)、のこる全員も市立の養護老人ホームにお願いし受け入れて下さつたことに感謝。**

校区の避難者数 87世帯 160人後で移動

5、【大口めぐみの里の復旧対策】

浸水時の水位状況



■ 被災した翌日7月23日は、雨が上がり水も引き始めた昼からホームに帰り状況を見るや否や後片付けにかかりました。浸水がひどかつたのはデイサービスセンターで床上180cm、浅いところで床上80cmでした。庭にはあらゆるゴミや肥料がはいつたままの袋などが散乱、部屋のなかも同様ベット・イス・タンスに電化製品が散乱していました。しかし、今時のベットなどは浸水に遭えば使い物になりません。部屋の中のものには衣類から全て処分。泥まみれの部屋や床、床下を洗うのもすべて水です。しかし、ボーリング井戸の揚水ポンプが浸水し故障していたので急いで買い替え交換しました。

■ その日から3日間というものは、一日も早く入所者の皆さまを迎え帰すために必死に復旧作業に努力しました。幸い建物を請け負つていただいた建設会社の方々、同じグループホーム協会の大一会、鹿児島県内外の遠くは福岡・大

分から旧大口市役所職員のボランティア、地域の方々、家族会の支援、職員の支援

をいただきました。それは部屋の中のもの全て処分し近くの公園に積み上げました。「こんなにすっきりした大掃除は始めて」と諦めながら大笑いしました。記録文書などは、一枚一枚天日干し、建物の内外の消毒作業、部屋は特にアルコールをたくさんいただき消毒しました。床や壁板は水に浸かり反り返って哀れでした。

■ 一番残念なことは、金もなく立ち上げ「自然災害の保険」をかけていなかったことでした。床、壁はもちろん断熱材などやり替えたくてもできません。また、電化製品からタンス類ほとんど買い求めなければならず頭は真っ白パニックの連続でしたが、支援の方々を支えられ急ピッチで復旧作業ができ被災 3 日目には、入居者の受け入れができました。ベットは鹿児島県福祉器具の関係団体から高価なベットを貸与して頂き、全員で喜び合いました。大げさかも知れませんが被災直後は「何とかしなければ」という思いと「お金のやりくりと先々を考えると自殺したい」の思いが交錯しました。ここで立直れたのは皆さんの強力な支えがあつてのことと深く感謝しています。

6、【被災から学び反省した事】

- **災害保険に加入していなかったこと、保険の検討をお金がない事で避け勉強していなかった。**
- **被災後のボランティアより命を守る事前のボランティアをもらえるよくなきずなを作っておくこと。**
- **水害の場合は、避難の時間があるが火災・地震のときは余裕がない。被災を想定した訓練を実施することが大事。**
- **非常用の食料、水、など準備しておく。**
- **市役所は消毒・防除作業などに自衛隊出動を依頼して頂きたかった。**

7、【おわりに】

■ 川内川の「激特事業」で河川がある程度整備されたことで被災者住民はす

っかり安心され、もう自分たちの目の黒いうちは災害はないという安どの声がきかれます。被災後立ち上げた川内川豪雨対策協議会も事務局だけになり検証もひとまかせという状況です。この平成18年災害は内水被害という点からは地元自治体まかせと言うのが実状です。国、県、市町も財政難もあって温度差があり川内川どころではないのが本音なのです。川内川は上流部の阿波井堰が4年後には転倒堰に改修されます。それだけでなくも頻発する世界的な異常気象の豪雨には驚かされます。防災はハード・ソフト両面の対策が肝要といわれます。私は、社会的な弱者といわれる高齢の方々の命を預かっている以上防災にもっと力を注いでいく所存です。

(私的でささやかな嬉しいニュースがありました。それは近くの高齢者から自宅を避難場所に使用してと申し出て下さった方があります。しかも、どうにでも改修してもいいという許可を頂きまして本当にありがたいことです。)